

七月十三日

八時過の東北新幹線で一ノ関へ。野田豊氏同行。野田氏は日本各地に独自のレストランを展開している事業家だが、ソフトウェアーのプランニングが常に先行してゆく新しい世代のプランナーでもある。仙台で乗換え。宮城大学名誉学長野田一夫氏と合流。気仙沼へ向う。十二時過気仙沼着。何年振りだろうか、この町は。臼井賢志気仙沼商工会議所会頭と再会。昼食後野田塾の講演会。野田一夫氏の港町スクエア構想を巡る講演。私は一時間二〇分をかけて一九八六年からの気仙沼との関わりの小さな歴史を述べた。当時の友人達、「大の佐藤氏が漁協の組合長、畠山氏が北勝（マゲ口漁の日本を代表する組織）の組合長。臼井氏が商工会議所会頭と、気仙沼を代表する顔になっているのが感慨深い。

会場には佐藤和則唐桑町長の顔もあつた。終了後懇親会。途中で抜けて旭寿司の二階での芸術選奨受賞お祝いの会。昔なじみの顔が集まってくれた。

今日の昼は気仙沼の観光計画の是非を論じたわけだが、気仙沼の漁業の顔と会っていると、それが、つまり本格的な観光事業を興すのがいかに困難かを知ることになる。鈴木晃市長のヤル気うんぬんだけの問題ではない。宴席では畠山嘉勝さんの大成長振りが眼についた。この人の根底には情がある。

名残惜しい宴席も小一時間で途中退席。佐藤町長戸羽議員と共に唐桑へ。まるでこれでは選挙前の政治家の日程だな。

唐桑のジジ（スナック）には、これ又、懐かしい面々、今は議員の三上戸羽ブチック鈴木仙台の結城さん夫妻、その他、皆唐桑臨海劇場の面々だ。気仙沼とは異なり、ここでは皆個々人の喜び、辛さそれにずるさもダイレクトに表現されてわかりやすい。皆キチンと年をとって発言にも抑制がきいてきた。名残りはつきなかつたが二三時頃、散会。佐藤町長宅へ。ここで佐藤町長の後継者の歯医者になった息子と、そのイバラギ出身の嫁、佐藤夫人と今日最後の小宴会。〇時倒れるように寝た。体力の限界である。

七月十四日

朝食は町長宅で、途中気仙沼から電話が入り、勉強会に早く来るようにとの事。町長に車で送ってもらい気仙沼へ。九時三〇分野田塾のホテル観洋へ。ホテル観洋のオーナーは魚屋だが漁業組合長にはなれぬ人で、ここが気仙沼人のしたたかなところだ。十二時終了。皆とお別れをして、本吉町の高橋工業社長の車で再び唐桑へ。唐桑のお荷物になっている漁火パークで昼食の後佐藤和則町長と共に亀谷さん訪問。小鯖のカツオブシ工場の再びの使用の願いをする。この豪気な船主を私は非常に尊敬しており、再会できて光栄であつた。再び唐桑にの意志を強めた。

十四時過、皆とお別れして高橋社長と共に一ノ関へ。十五時チヨツと廻ってベシー到着。菅原さんは昼食で不在であつたが、なんとソニーの伊藤八十八氏が音響関係のエンジニア数人と、これも菅原待ちをしていた。

今日はどうやら良い日にベシーに来たようだ。ソニーミュージックの八十八さんの考えで、現CDサウンドエンジニア達に、つまりデジタルサウンドの最前線の連中に、菅原の筋金入りのアナログサウンドを聞かせて、デジタル技術でできる音を、よりア

ナログ音に近づけようと、それでキチンと両者を聞き比べてみようという会が今日なのだった。だから菅原のレコード選択も、いつもよりズッとハードなものばかり、これでもか、これでもかのアナログ・サウンドがベーシーに繰り広げられ、流石の私もグツタリ疲れて、一度ホテルで休みたいと思っただくらい。

CDにも色んなレベルがあるらしく、アメリカのCDサウンドの名人とやらのCD音も聴くことができたが、これはソニーの八十八さんのエンジニアが作ったものの方が良かった。しかし、この音の最前線の戦場らしきベーシーで、アナログ音、つまりレコードに針をおとし、真空管でJBLの古いスピーカーから、の音が圧倒的にCDのデジタル音よりも凄いい、全然異なる水準のモノだというのが今日は目の当り、いや耳当りでできて良かった。感じただけではイカンというわけで、八十八さんにレクチャーを受ける。

デジタル・サウンドとは何か、アナログとはそして……。この世界、つまり音楽ではあるのだが、音そのものの複製技術の世界の深さに仰天してしまう。面白い。まさか、ヘルベルト・フオン・カラヤンの考えがCDのスタンダードになってしまったなんて事は初めて聞いた。早速×日が過ぎている室内の連載にこれは書いておきたいと考えた。眼ざわりならぬ、耳ざわりとは何かと言う事だな。しかし、ここはオジさん達の少年クラブであるよ。好きな事だけできるのが昔の少年の特権であったが、ベーシーにはその生き残りが集まるな。近くの洒落た韓国料理の店で夜食をとり、又小宴会。菅原がとってくれたホテルに八十八さん達と辿り着いたのが〇時過。面白かったあ。今日も。

七月十五日

一ノ関のホテルで眼ざめる。二日間余りにも眼まぐるしく色んな事があったので頭の中は完全な力オス状態である。帰りの新幹線でチョツと頭を休めよう。又もや、ゲートのイタリアは忘れられたママになっている。五〇代はまことに困難極まる年代である。疲労するというのが本当にやってくる年代なのだ。

十一時前の新幹線に乗るのには、ここを十時四〇分に出れば良いだろう。のんびりしていたら十時がチエックアウトタイムですとの電話があつて仕方なく、そば降る雨の中を一ノ関駅へ歩く。十一時前の汽車で東京へ。車中で気仙沼の観光課千田基嗣氏にいただいた詩集湾Ⅱを読んでいたら突然、私が登場する詩アズマエビスの凱旋に遭遇してしまった。私は異邦人としてそこに唄われていた。私を忘れずにいる気仙沼人がいるのだね。帰りの汽車ではグッスリと良く眠った。